

母の丸い字

作家 太田治子

六月半ばに、娘の万里子と二人で引越しをするこ
とが決まった。五月の連休のころから、万里子の会社
が休みの日を中心に母娘二人、引越しの整理に追わ
れている。

「あれ、小さな鉛筆がこんなところからもでてきた
よ」

私の中学校時代からの古い教科書の入った紙箱をあ
けた万里子がおかしそうに笑いながらいった。いつ
のころのものだろう。二センチ程のちびた鉛筆が一本、
これもおなじきのように丸く小さい消しゴムと共に紙
箱の底に眠っていた。

私は、今回の引越し作業の中で見つかった鉛筆ば
かりを入れた紙袋の中に、その一本を加えた。既に十
本近くある。

「ママ、大切にしたいのはわかるけれど、何十年前の
ものも、今の鉛筆と変わりがないわ。思い切って処分
した方がいい」

万里子がいった。

「そうね。この際、捨てるでいいから、
そうは応えたものの、ちびた鉛筆の一本、一本が、
宝石よりもずっと大切なものと思われてくるのだった。
もの心つくか、つかないころから、私は鉛筆を手に
していた。わが家のアルバムには、満二歳の誕生日の
直後に私が描いたとされる「自画像」の鉛筆画が、当
時の写真と一緒に貼り付けられてあった。絵の中の私
は、いかにも弱い男の子の顔をしてみえる。消化
不良中毒直後のことだったという。そういえば、傍
らの写真の私も、母の膝の上でぐったりとしていた。
「自画像」の絵そのままに短い男の子の髪型である。
この一枚の絵からも、「私は、絵を描く才能があった」
と思うのである。今回の引越しのための仕分け作業
の中で、幼女時代のスケッチブックを久しぶりに開い
た。小学校低学年のころまでのものが、母の手により
何冊かにわけられていた。

「やはり、これは絵の天才だったのかもしれないわ」

鉛筆画の一枚、一枚をみつめながら、思わずそう声
に出した。

「まあ、ママはうぬぼれが強いね。それより、作業
の手を休めないようにしてね」

傍らの万里子がおきれたようにいった。母と幼い
私が散歩している絵も面白いが、それよりも『タバコ
ひめ』というお姫さまがタバコをスパスパとくゆらせ
ながらハイヒールで歩いている絵が実にユニークであ
った。ハイヒールもタバコも、母とは無縁だった。そ
のような女性を、はたしてどこかでみかけたことがあ
ったのだろうか。それは、よく思い出せなかった。し
かしこの絵を描いている時に、とても楽しかったこと
だけは、確かな記憶として残っていた。ベレー帽をか
ぶった「自画像」もあった。そうした絵の多くは、鉛
筆画だった。五歳あたりからだんだんとクレヨンを使
った絵がでてくるものの、鉛筆画の方が断然面白いの
である。タイトルが「おばあさま」の絵もすべて、鉛
筆で描かれていた。腰が曲がり杖をつけていても、首
飾りをして、ハイヒールをはいている。愛らしいおと
しよりばかりである。もしかしたら、ハイヒールは絵
本の『シンデレラ』の中で、シンデレラのはいたガラ

スの靴からイメージしたものだったように思われてき
た。それが、「タバコひめ」や「おばあさま」へと変
身したところが、独特だと思う。実際の祖母にも、こ
の世であったことがなかった。そうやって空想の翼を
はばたかせることができたのは、鉛筆のお蔭であった。
鉛筆は、思う存分自由に使うことができた。一九五〇
年代、さて鉛筆は高かったのか、安かったのか、それ
はよくわからない。母は大病まもなく、私の小学校入
学直前まで叔父の家で母娘二人の居候生活を続けてい
た。お金のない母は、鉛筆だけは自分のおさがりを、
娘にまわすことができた。一方クレヨンやクレパスと
なると、まとまったお金をだすことになる。それらの
新品を私に手渡す時に母は決まって、

「大切に使いましょうね」

そのように念を押した。

「はい」

いつも大きな声で返事するものの、気が付くと一本、
二本と、まだ使いたてのものから順番にどこかへ姿を
消してしまっていたのだ。鉛筆と違って、私はそ
れらを恐る恐る使っていた。

鉛筆とは、生まれつき相性がよかったのかもしれない